

2-3 手書き場帳を目指して

技術の著しい進歩によって、良い計算環境が容易に手に入れられるようになりました。にもかかわらず、成功した投資家の多くが、手書きの場帳を使い続けており、新しく投資を始める人にも、その実践を勧めています。

現在の計算機は、自ら売買法を生み出してくれません。売買法を決めるためには多くのパターンを自分の脳にたたき込む必要があるのです。そこで、次のような目的で手書きをするのでしょ

- (大きな紙に書くことで) 細かい変動を正確にとらえる。
- (手書きチャートは常に同じスケールなので) 変動幅を正確にとらえる。
- (手で書くのは時間がかかるから) 時間をかけることで、記憶を促進させる。
- (英単語を覚えるときのように) 手を動かすことで、記憶を促進させる。

最後の2つ(特に最後の1つ)は、実際に手で書く以外に問題の解決にはなりません。しかし、最初の2つについては現在の計算機でもある程度は解決が可能です。

画面の設定変更

人間の目は、計算機の画面の精度よりも、ずっと細かい情報を識別できます。また、計算機の画面は一般に手書きのチャートよりも小さくなりがちで、これは計算機否定派の主張の1つです。

まず、可能なかぎり大きな画面を用意しましょう。安価なパソコンには15インチの画面が付属していることが多いようですが、なるべく17インチ以上をお勧めします。

また解像度(画素数)は、なるべく上げましょう。解像度は、Windowsのコントロールパネル→[画面]→[ディスプレイの詳細]から変更できます。通常、解像度を上げると使える色の数は減ります。しかし、チャートを表示する目的では、色数よりも解像度のほうが重要です。

解像度を上げると文字が小さくなり、見づらくなるかもしれません。そのためにも大きな画面を用意することが重要になるのです。

小さい画面しか持っていない場合でも、チャートギャラリーのウインドウは、なるべく大きくして使うようにしましょう。チャートギャラリーは、ウインドウの大きさを覚えているので、次の起動時には、同じ大きさで起動します。

段の属性

計算機の書くチャートは、多くの場合、価格の範囲を自動的に調べ、画面をなるべくいっぱい使うようにチャートを縦に伸ばした

り縮めたりします。これは一見便利そうな機能に感じます。しかし、実際の相場の売買においては、変動感覚を鈍らせるという意味で、致命的です。

図表2.10aを見てください。これはソフトバンク（9984）の2005年2月から2005年5月にかけての日足チャートです。チャートの右側の陰線は、急落しているように見えます。

次に**図表2.10b**を見てください。これは同じソフトバンクの約3カ月後のチャートです。10月に急落に見えた部分は、チャートの左端に移り、それは小さな押しだったことを物語っています。

図表2.10の2つのチャートの画面右端を見て、目盛り線の間隔が2倍に変わっていることに注意してください。チャートを手で書く場合、1円を1ミリメートルの幅で書くなど、固定の値幅で書きますので、このような危険がありません。

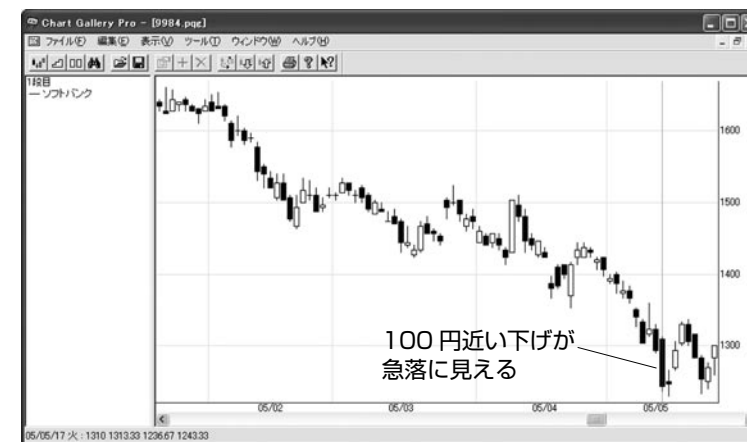
チャートギャラリーでは、手書きチャートのように「1円を1ミリメートル」のような、厳密な指定はできません。しかし、ある程度値幅を固定することが可能です。チャートウインドウ中のそれぞれの段に対して、価格や指標の値の最大値と最小値を指定します。

例えば、1段目の最大値と最小値を指定するには、画面の左半分の「1段目」と書かれたところをマウスでダブルクリックします。すると、**図表2.11**の設定画面が開きます。

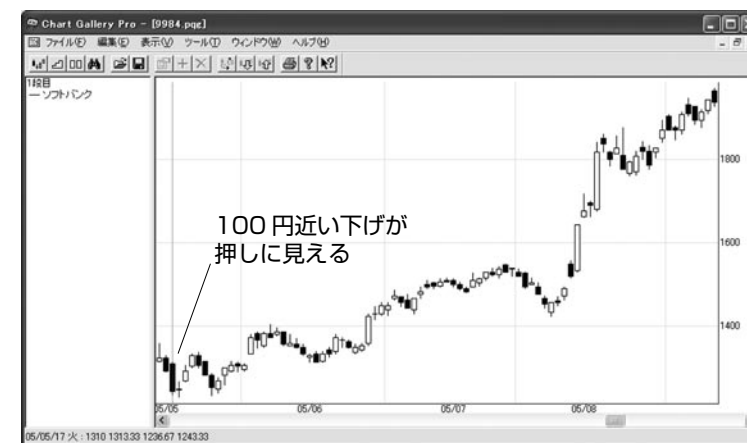
何も設定しない場合は自動で最大値と最小値を決めることになっているので、例えば常に2000円幅を表示するように、最大値と最小値を決めます。

最大値と最小値を固定すると、当然のことながら長い期間の

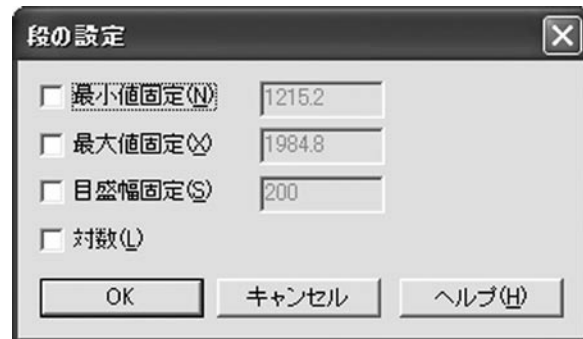
図表2.10a 大きな下げ?



図表2.10b 小さな押し



図表2.11 段の設定



チャートを見た場合は上下に切れてしまいます。これでは不便だと思う人は、目盛幅のみを固定してしまうとよいでしょう。

例えば、目盛幅を500円とすれば、価格帯にかかわらず常に500円間隔で横線が引かれます。このような設定をすることで、ある程度は変動を正確にとらえられます。

また、最大値と最小値の指定は、指標の値を表示するときにも便利です。例えばRSIのように、値が0～100%の間に限定されている場合、最大値を100、最小値を0と、それぞれ固定すべきでしょう。

ちなみに、段の属性ではありませんが、チャートの1日（1週、1カ月）の幅を変えることで、画面に表示するチャートの期間を変えることもできます。幅を変えるには、[表示]メニューから[幅]を選びます。

銘柄群機能

銘柄の置換については前節で説明したとおりです。さらに、ある特定の銘柄群、例えば、IT銘柄や鉄鋼株などに絞ってチャートを連続して置換し、確認したいことがあります。

そのような場合は[ファイル]メニューの[新規作成] → [銘柄群]を実行し、[編集]メニューの[追加]コマンドなどで、希望の銘柄を追加していきます。

新規に作成した銘柄群、起動時に開く「お気に入り」や検索結果などの銘柄群ウインドウで銘柄名をダブルクリックしますと、すでにチャートを開いている場合は、そのチャートにすでに表示されている銘柄をダブルクリックした銘柄に置換します。またチャートを開いていない場合は、新たにローソク足のチャートを作って、そこにダブルクリックした銘柄を表示します。

後ほど説明する銘柄検索機能の検索結果や「お気に入り」などの銘柄群ウインドウはお好きなチャート上で「Shift」+「↓（下矢印）」キーを押すと次々に銘柄を切り替えて表示できます。

チャート定義ファイルを保存する場合は「移動平均」など、どのようなチャートが表示されているか示す名前が適当です。そして銘柄群ファイルを例えば「お気に入り」や「IT銘柄」のように保存します。こうすれば「お気に入り」銘柄群を「移動平均」のチャートで次々に表示させたり、「IT銘柄」群に切り替えて「移動平均」のチャートで次々に表示することができます。

銘柄検索機能（プロ版）

「チャートギャラリープロ3」以降のバージョンでは、チャートギャラリーのさまざまなテクニカル指標を使って、銘柄検索の機能が利用できるようになりました。例えば、次のような条件を組み合わせ、任意の日付で検索することができます。

<例>

- ① 売買高が10万株よりも大きい
- ② RSIが30よりも小さい
- ③ RSIが上向き反転

検索条件を作成するには [ファイル] メニューの [新規作成] → [検索条件] を実行します。条件検索ウインドウが表示されますので、「(ここをダブルクリックして条件を追加)」の箇所をダブルクリックします。

「指標1」には、基準となる指標を選択します。

「指標2」には、比較対象となる指標を選択します。

「条件」を選択します。

「備考」は任意に入力します。

例えば「出来高（売買単位）が100より大きい」という条件で検索する場合、次のように選択します。この場合、売買単位とは1000

株単位であれば10万株、100株単位であれば1万株の出来高を検索するという意味です。

指標1：出来高(売買単位)

指標2：定数、100

条件：大きい

条件の追加が終わったらキーボードの「F5」キーを押して検索を実行します。「検索対象」ダイアログボックスが表示されますので任意の市場と検索日付を指定して [OK] を押します。

しばらくすると検索結果が表示されます。検索結果は銘柄群ファイルとなり、結果をチャート上で「Shift」+「↓（下矢印）」キーなどで次々と銘柄を切り替えて表示できたり、検索結果を「お気に入り」など別の銘柄群にドラッグアンドドロップしたりできます。

独自指標の追加（プロ版）

「チャートギャラリープロ3」以降のバージョンでは、独自に作成したテクニカル指標をチャートに表示し、さらにその指標で検索もできます。

独自指標の追加は [ツール] メニューの [設定] を実行し、「IndicatorPlug」タブをクリックします。[DLL追加] ボタンから「DLL」ファイルを選び [OK] を押してチャートギャラリーに読み込ませます。正しく登録されると指標の一覧に追加されます。